

標註枕草紙讀本

二



標註枕草紙讀本卷二

佐々木弘綱標註



木の花ハ 三十二段

梅のこくも薄くもつらむ。梅の花びらおなき
よ。紫いろこつき。枝細くて咲く。藤の花志なき
長く。色よく咲たらいとめでう。うの花ハお
とりて何となけれど。咲比のをう。枝字の法
お隠らん。とをか。紫の帰るに。紫花のこつり色
きあや。の家どもおどる。ある垣縁などよ。いと
伊う。咲く。う。をう。う。れ。青色の上よ。白きハ



新古今和歌集
くららん。新
古今和歌集
えや。忍。ね。
子規。もう。の
を。の。が。げ。よ。か

くれて。
抄五福のこく
書きふとある
いんやうねい
一本をよめて
のいとこくど
四字を福と
抄云紫花の
よい紫花れど
我れよい梅
なごやうふ
もそあそいね
バささくす
とあもねふ
他らねバ又つ
けらどたよせ
ずといへるよ

とつぎさねのづきする青くら紫をどふか
ていとをか四月のつごもり五月のついで
などのはひし福の紫のいとこく書きふ花の
と白く咲こつ小雨のありつとめてなごい
よにさく心あるさふをのり花の中よりみの
おぐねのまると見えそいみどくきいやはよ
えたらふど新紫よぬきたる梅もおとす
公のよまがとそへバもや猶更ふつふべき
もあさむさなりの花よふささくあやき
おろしてめふちかくも遊き文つけぶふせず
あいきやうおられたる人の顔るど見ていた

やとあり。
あいなくい何
の候かゝる陰
もなぐささま
トう又由るさ
なり。

美隆云中昔の
物清なるどよ
詩の句を引た
るは多くいこ
とほよみよて
音讀ハをくる
しこれバこく
も一枝ハいと
えごとよむべ
くや紫花ハ
漢なるべし。

ひふりふもさふ其色よりしてあいたくつんゆる
をむろくふ浪なきおろそ又も他るるを
さりともあるやうあらんとてせめて見えば花
びらのさうふをうきうあひこそんもとれく
つきたれれ揚き肥みうどののほほふ達て泣けら
顔ふ似せて紫花一枝春雨をむびつりねどいひ
たるハおぼろけあらトと思ふよ猶いみどりめ
てし事ハたぐひあらトおぼえつり桐の意
紫よささたるハ猶をうききを紫のいろつり
まうしてあきども又と本どもとひとつりい
ふべきふあらむもろくふこつとぐりき名つき

度かよらうく
しき名つきき
るるハ風凰の
多き極相の
おまへにむす
の雲の外に合
せぬうしん
あふちの俗よ
せんごんの本
とつふおるり
標とかくハ候
ハ棟とあべし
かつまこの池
ハ奈西の系
葉師ののれを
いひつらんた
りとぞ。

たつちのぐれももほらんふことなりまして
琴ふつらりてさまぐくふる縁の出くるなを
うしとハ世の常ふつふべくやいあるいみど
こそハめでつけま。木のさまぞよんげをれど。
あふちの花いとをうしがれをよさまことには
きてかあはげふ月お日お何ふもをうし。

池ハ 三十三段

かつまこの池。いそれの池。おへの池。お
ぬよまおりし水鳥のひまなくまさらざしが。
いとをうしんええしなり。水鳥の池あや志
うをどてつけるなうんといひしうばお月を

おなりといけ
後云みいを
一の池をほみ
みづるしと結
どてつふよや

猿渚の池よ系
女の帝れ寵愛
おとろへしを
恨中て身をな
げとるる捨連
集大和物語を
どよみえうり
おまへの池恒
昔の神糸の池
をおまへの池
といへるう。

どまて。雨いとふらんとまら幸ハ此池よお
とつふおあくなんある。又目のいみどく照る幸
ハ春の始よ水るん多く出るとつひしなり。むげ
おなくかわきてあらばこそまもつけぬ出る折
もあつちるをびとまらおつけるうれといら
へまほしうなり。猿渚の池系女の身をるげ幸
うをまこしうして。新幸をど育らんこそつみど
うめでたくれ縁くうれ髪をとく死がよみらん
ねどいふもおらうなり。おまへの池又何の心
ふつけるなうんとをうし。かみみの池。うや
まの池みらりとつふ歌のをうしおおおゆりに

うやまの池。六
帖。むさしなる。
うやまの池の
みくりこそひ
けばとえすれ
とまやたえす
る。
原の池。玉藻ハ
なかりその家
ハ。風俗上野分
よ見えたり。

茶玉ハ。後命徳
ともいへり。他
花の中。小葉。抱

やあくん。らひぬまの池。けく池。玉藻ハな
くりそとつひくんもをか。まきごの池。

せちハ 三十四段

五月小志くハ。さうぶ。蓬ちどのかをりあひ
たるも。いと。ド。うをう。九重の内をさ。め。て。つ
ひ。しらぬ民のをみ。う。ま。で。い。う。で。わ。ぶ。ち。に。志。げ
く。ふ。う。ん。と。ふ。き。わ。た。し。る。摘。い。と。め。づ。ら。し。く。
いつ。う。こ。と。を。り。い。さ。も。志。ふ。さ。し。宮。の。う。き。み
曇。り。渡。り。た。ら。よ。后。の。宴。る。ど。ふ。ハ。ぬ。ひ。ど。の。う。り
沖。樂。玉。と。て。い。ろ。く。の。糸。を。紐。さ。げ。て。ま。あ。ら。せ。れ
だ。み。ち。や。う。た。て。た。ら。も。や。の。柱。の。左。右。ふ。つ。あ。と

を入て。糸もて
かざり。と。る。も
の。なり。
抄。み。ち。や。う
と。ま。つ。る。と
あ。る。い。と。ろ。し。
一。本。よ。と。て。と
ろ。と。あ。る。う。し
よろし。

村儀ハ。むらあ
り。て。あ。そ。ふ。こ
こ。き。紐。糸。を
か。け。ゆ。ひ。つ。く
る。なり。
よろし。う。あ。ふ
柳。云。大。く。こ。お

り。九月九日の葉を。あ。ね。と。す。ご。の。き。ぬ。よ。つ。つ
み。く。ち。あ。ら。せ。た。ら。同。一。柱。ふ。ゆ。ひ。つ。け。く。月。比。あ
る。葉。玉。と。り。う。へ。て。す。つ。あ。る。又。葉。玉。と。菊。の。を。り
中。で。あ。る。べき。よ。あ。ら。ん。だ。れ。ど。それ。ハ。皆。い。と
を。引。とり。て。抱。ゆ。ひ。る。ど。して。志。さ。し。も。る。御。せ
く。ち。あ。ら。わ。の。き。ん。ハ。さ。う。ぶ。め。さ。し。う。ら。し。
あ。の。つ。み。つ。け。を。ご。し。て。さ。ま。あ。ぐ。から。ぎ。ぬ。お。ご。み
長。き。糸。を。う。き。を。り。枝。ども。村。濃。の。紐。して。結。ひ
つ。け。を。ご。した。ら。め。づ。ら。し。う。つ。ふ。べき。み。あ。ら。ね
ど。いと。を。か。い。ぶ。く。葉。ご。よ。に。候。と。て。様。を。よろし
う。あ。ふ。人。や。い。あ。ら。づ。ど。あり。く。さ。し。い。べ。の。や。ど

あふんハあ
トあり。
つねよ。こ
イチヅニとい
ふえあり。
そむえさるハ
今も大の子ガ
そむえろ。と俗
みつよ目ト。
たそれとろ小
舎人之山家集
物ものひらけ
ちむる。楯よ
り。そむえて風
の渡るちろ我
とあるも。同ト
こ。ろあり。

ねどふつけてい。いみじきつぎとつねあ
たつちをまもり。人ふんらつべえもつとずら
ありとあひしるを。そむえしるこつとねりつらハ
などふ。いきとつてなくもをう。紫の紙よあ
ふちの花青き紙よとろぶの紫をうまきてひ
きゆひ。又白き帝を。ゆひてゆひつらまをう。
いと長き根など。文のありふつれをどし。たる人
どもむとも。いとえんちるか。つりごとか。んと
いひ合せ。語らふどち。いんせあ。とせなど。しるを
う。人のむきあ。やむごと。なきふ。ふ。伊又きこ
えぬふ人も。うふ。い。心ごと。ふ。ぞ。な。ま。め。う。う。を

やるぎ。かきと
抄あり。季吟
云。柳の字柳の
字よまがいた
るゆゑよ。云と
とあるれ。柳
ハ柳の語。こ
そのの本。蜂吟
日記よ。そのの
お祭の打まど
アくる。校まつ
けて。夏山の。本
下家の。深々れ
バ。かつぞ。まげ

か。き。ダ。ダ。れ。の。ね。ど。ふ。部。公。の。名。の。り。志。う。ら。も。
ま。づ。く。を。う。う。い。み。じ。
木ハ 三十五段
かつら。 ぐえふ。 やなぎ。 ちぢばな。 そむの
本。 ちぢばな。きこ。ちぢばな。花の本ども。お
ちて。お。な。べ。ち。ち。緑。成。た。中。中。時。も。か
び。こ。き。紅。紫。の。つ。や。め。きて。思。ひ。う。け。ぬ。青。紫。の。中
より。う。お。う。め。づ。け。し。ま。ゆ。み。さ。う。ふ。も。い。て
ま。その。お。も。な。け。ま。ど。や。ど。り。木。と。つ。ふ。名。い
と。あ。れ。ん。さ。う。き。臨。時。の。祭。法。神。樂。の。折。など
いとをう。よふ本ども。をあれ。神の。い。前。れ。お

きの色もえよ
け

六帖いづみち
る。志の田の杜
の楠の本の子
えよとくれて
物をこそぞん

五月。光房云
まほのとあり
を五月と誤れ
るるるべし。は
徑より五月
よてハ。又云分
がし。

とつひとどめらんも。どりつきをうし。らんめ
本ハ。ころも多かる。不ふも。らとおまどらひこそ
ら。び。抄どろくしき。むひやりな。どうとまりき
を。ちえふ。うれて。慈も。る。人の。た。め。し。よ。い。も。れ。こ
る。ぞ。た。れ。う。は。敷。を。あり。て。つひとどめらん。と。た
も。ふ。よ。を。う。し。ひの本。人。ち。か。ら。ぬ。抽。る。れ。ど。
み。つ。ば。よ。つ。む。の。殿。づ。くり。も。を。か。し。五。月。よ。雨。の
こ。る。ま。ね。づ。らん。も。を。う。し。かへでの本。さ
やうなる。あも。と。之。出。る。梢。の。赤。み。て。お。る。ど。か
た。あ。さ。し。ひ。ろ。ご。り。る。葉。の。さ。ま。花。も。い。と。げ。ら
れ。だ。ふ。て。虫。ぞ。の。か。れ。る。や。う。ふ。て。を。う。し。

あぢきなきハ
ウトマシイ。ラ
千モナイ。とい
ふ。う。ろ。ろ。あり。
かねごとハ。マ
ヘヤクソク。く

志らがり云々

あぢきなきハ。世ちうくも。見えきこ。え。む。み。た
け。ふ。ま。う。で。か。へ。る。人。な。ど。志。の。む。て。あり。く。め
る。枝。ぎ。し。な。ど。の。いと。も。あ。ま。ふ。く。げ。よ。あ。ら。く。志
け。ま。ど。何。の。心。あり。て。あ。ま。ひ。の。本。と。つ。け。らん。
あ。ぢ。き。な。れ。か。ね。ご。と。な。り。や。た。れ。ふ。この。め。た。る
ふ。う。あ。ら。ん。と。と。ふ。ふ。志。く。ま。ほ。う。を。う。し。祿
ど。も。ち。の。本。人。を。み。く。る。う。べ。き。さ。ま。ふ。も。あ。ら。ね
ど。葉。の。い。み。ど。う。こ。ま。う。ふ。ち。ひ。さ。き。が。を。う。し。き
なり。あ。ふ。ち。の。本。や。ま。な。し。の。本。椎。の。本。ハ。
とき。ハ。本。ハ。つ。ぎ。ま。も。あ。る。を。を。れ。し。も。葉。が。へ。せ
ぬ。た。め。し。あ。い。を。れ。る。も。を。う。し。志。ら。が。り。な。ど

後云。此一版
をべてときが
さきごとあり。
拾遺集よ。人丸
三引の山路も
あつた。白根の
松よと葉よも。
雪のふれ、バ
つふりよても
をりよつけて
も。フ。フ。フ。り
のりあり。こ
ふハ似つうは
瑞乱し。さる
るべし。

つふものまゝしてみ山本の中ふもいとけどなく
て。三位二位のうへのきぬそむるをりなる。まど
葉をぶふ人れえつめる。めでたき事。をうきま
よ。とりつづべくもあらねど。いつとなく雪のふ
りたるふ。ふんまぐへられて。まごのをのみうらめ
出雲の國よおちけつ。はすを思ひて。人丸がよ
みつる歌などを見ら。いみじうあまれ。つふ
ふりても折よつけても。ひとふ。あまれともを
う。ともきくおきつる。物ハ草も本も鳥虫も。お
ろくふこそおがえぬ。ゆづり葉のつみどろふ
さやうふつやめきつる。いと青う清げなるふ

六帖。をび人ふ
宿かすが。世の
ゆづり葉のお
葉せん。世や。君
をよをま。ん
後撰。相本よ。葉
まの神のま
なるを。さ。で
そ。お。た。り
なる。る。

思ひがけむ似るべくもあらは。くきの赤うきら
くまうみえうら。こ。い。や。れ。どもをうけ
れる。べての月比。露も。ん。ぬ。物。の。志。を。ま。の。つ
ごもりふも時あきて。なき人のくひ物よも志
くよやとあをれなるふ。又よをひのふるは。ご
めの具ふも志てつうひたある。い。つ。なる。ふ。
お葉せん。世や。といひ。なる。も。た。の。も。か。い
本。い。と。を。う。葉。の。神。の。ま。ま。ん。も。い。と。か
う。又。み。漸。の。督。佐。尉。を。を。い。ふ。らん。も。を。う。
ま。ぐ。な。れ。ど。ま。ろ。の。本。か。解。め。きて。ま。ろ。き
家の物といええむ。

鳥ハ 三十六段

みこも。後居云。ふとぐのり。らん。鶴の字より。おしあて。さもいへるか。巫をバ。みこと。いへるなり。

ふとぐのり。らん。鶴の字より。おしあて。さもいへるか。巫をバ。みこと。いへるなり。みこも。ひと。ひと。山鳥ハ。友をこひてな。く。境をんせ。れ。むら。いとあをれ。谷へ。て。た。程。を。いと。心。を。鶴ハ。こ。さ。ま。な。れ。も。鳴。聲。雲。お。ま。で。ゆ。い。と。め。で。か。ら。赤。き。雀。い。か。る。が。の。を。と。り。た。く。み。鳥。鴨。い。と。ん。め。も。ん。ま。る。こ。み。ま。も。う。さ。て。よ。ろ。づ。お。つ。か。く。ね。ど。ゆ。ま。ぎ。の。森。お。ひ。と。り。ハ。福。と。あ。ら。そ。ふ。らん。こ。を。

りハ。ね。と。あ。ら。そ。ふ。お。を。六。帖。と。ね。の。上。の。雲。お。ま。で。ゆ。い。と。あ。を。れ。も。ん。ま。る。こ。み。ま。も。う。さ。て。よ。ろ。づ。お。つ。か。く。ね。ど。ゆ。ま。ぎ。の。森。お。ひ。と。り。ハ。福。と。あ。ら。そ。ふ。らん。こ。を。

を。く。く。れ。ま。こ。も。水。鳥。ハ。を。い。と。あ。を。れ。あり。が。さ。み。ま。か。さ。り。て。ね。の。上。の。雲。を。拂。ふ。らん。ま。ど。い。と。を。う。く。都。鳥。川。鳥。ハ。友。ま。ど。ま。は。む。む。こ。も。層。の。雲。ハ。遠。く。き。こ。え。た。る。あ。い。れ。な。り。鴨。ハ。ま。ね。の。雲。お。ま。で。ゆ。い。と。あ。を。れ。も。ん。ま。る。こ。み。ま。も。う。さ。て。よ。ろ。づ。お。つ。か。く。ね。ど。ゆ。ま。ぎ。の。森。お。ひ。と。り。ハ。福。と。あ。ら。そ。ふ。らん。こ。を。

うねまにあ
ず云とあり
とよるし

今いかいせ
んハ抄子天性
さやうよ生付
これバせんか
さるしと之
むしくひハ別
香の名よて鶯
の美名よハあ
らず

ちうく紅梅もいとよくかよひぬべきさよりな
りかしまうでつきけはあやしき家の足取もな
ぎ梅をどよハ花やうにぞなくもるなりぬもい
きたふきこちをれども今いいうせん其林
の末まで老老よ唱てむしひるどようもあ
ぬもれハ名をつけうつていふぞちをしく花
ごきこちをるそまも雀などのやうお老よあ
るもすらバいとおほゆまぎまきくゆんこそハ
あうぬ年をちうへるいどをうきことお歌ふ
もふみよまつくるるハ猶喜のうちぢらま
うばいふをうからましく人を人げかう世

そりやハ十
ろろそろろか
いそしりハ世
ぬとあり

香林院抄云空
性五分うちあ
とつふふそ
知豆院拾花抄
子千葉み建三
云とあり

のねがえあまづさうちうちうちあよつるをバ
そまうやハまるとび鳥などのうつハんいまき
れいれなどまら人世ハかハそれをいみ
かすべき拍とるりこれバとふよ心ゆるぬこ
らちまらあり祭のかハさんとして雲林院知豆
院などのまへハ車をたてこれバ部公も志の
ぬよあうんなくふいとようまねびふせて本
言き本どもの中ハ法をみ唱うるこそさうせが
をかハまき部ハ猶更いふべきかさるい
つらう志さうり類ふもきこえ歌ふお花を桶を
ぞふやどりをとてげさかうれさるもゆさげか

らうくーきハ
俗ハ切者ヲ
とつふまゝ
そをほめて
いつるそり。

あてハ上品ナ
キヤシヤナケ
グカイウツク
シサウナニ
おふハふりと

る心ぞへそり。五月雨のみどろ秋の涼覚をうて。
いうで人よりさきみきんるとまたきて。秋ふの
く打いでたる春のらうくさうあいぎやうづき
たる。いみどろ心あくがれせんうさへみる月
お成ぬれば。折もせびるるぬすづていふも
おろなり。よろなく拍すべていづきおめでこ
しちごどものみぞささるるき

あてなるもの 三十五段

うす毛よささあのかさみ。かりのこ。け
づりひのあまづらふいりてあささきかなま
りふいりる。さあさうのず。藤の花。梅

るとあり。ハ
ア。三言一本ふ
て。おぎるひと
り。

契ん。秋の心
と。ささざして。
秋風とのむみ
のまの春。この
寂蓮の秋ハ。此
茶紙ふよりて。
詠ふついで。鬼
の子の原同ハ。
知がさ。

ねらづきむし。

花は雪のふりうりる。いみどろらうく
らきちごのいちごなごらひらうら。

蟲ハ 三十八段

秋虫。松虫。ささおり。きりぐす。蝶。われ
から。ひをむし。螢。葉虫。いとあをれなり。鬼の
うみくれバ。おあふ似て。これもおそろしきこら
ちぞあんとて。おあのみきねお引きせて。今
秋風ふらん折もぞこんださまでよとつひてお
げていなるもささ風のききうさりて。八月
むりりみなれば。ちよくとさるをげよさく。い
みどろあをれなり。ひらら。ぬらづき虫。又

は虫類を定て
れ持するやう
なればさう名
づけさうな。

人の名よつき
さうい列子か
甘んといつ人
あれバうとま
しき名ことい
ふえさうとま
しつ万葉抄よ
うりて改さう
夏虫ハ青蛾と
も雲とも云り
蟻ハ一符の機

あそれさうさう道心おさうてつきわりくら
ん又思ひのけむさうきおるどお不どめきさう
閉つけさうさうをさういさうれ 蟻こそふくき物
のうちにいつさつべさうれあいつさうやうなくふくき
物いあれんさうさう出づき物めやうよあらぬ
どよろづの物お居おさうおぬさうさうしてお
たるなどよ人の名よつきさういさうとさうい
夏虫いとさうさうさうさうのうへさうありくいとを
かさう蟻いふくけさうかろびいみさううておの
上などをさうあゆみあさうさうさうさうさう
ひるね 三十九段

ことつみ説よ
ろさうかさん
かさうさうさうハ
タモナタルと
いふさうなり
おくさうもはこ
とハありあそ
せ考さうさう

やうさう和名抄
ハ車蓋を夜架
太とよめり
あめうさう同書
お黄牛を阿米

七月をうりお風めいさうさうさうさうさうさう
しき日大かさういと涼さうさうさうさうさうさう
たるおあせのさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ふげさうさう物 四十段
おみあさうさう人のふきあやめさうさうさうさう
おみさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
入さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
たる 老さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

宇之とよかり
ねまどひハ産
まじくよひま
どひのまどひ
みぬあす
ちひつみうら
深長云つまむ
つみといへむ
流推をひらふ
を云なるべし
物よハ推のま
をくひうらと
とあり
やかうハ夜行
の字音あり
けんぎハ嫌疑
の字音あり

又さかき男もちつとよいとえぐるきふこと人
のちこおゆるとそねつみくら老なる男のねま
どひたる。又さやうふひげぐらなる男の志ひ
つみくら。歯もあき女の梅らひてすがらうら
げまのられをのちまきくら。ははハそまの
みらそあめれ。ゆげいのまけのやかう。かりぎ
ぬ海もいとあやげさう。又人ふおぢららう
うへのきぬぞおどろくくちちまよふも
人えつけバあまづらう。けんぎの者やあると
そまぶれまもとぐむ。六位藏人うつのはら
くらんとうちつひく世おなくきくらくまき抱お

つきなきハフ
ウツリフニア
ヒなどつふ志
あり
このめ文意た
とひきらく
うらんもまけ
あましくうら
とおくうら
うらとこ
念してハシン
ボウシテなり
とめてハさ

ねばえ里人げまなどハ此世の人とごふとひこ
らず目をぶふん合せておちとをくく人のうち
つらりの細殿などふ恐びく入あくくるこそい
かすつきなるまきうらまき抱あうらうふら
けたるをうまのわりのげよつやあうまら
あうらんもとおくうらまきとよふか
ふうへのきぬまきあげて縁まのものをや
うらてわぐねかけうらん秘ぞ似げあきやか
のくなる此つうらのねどいねんとてとめ
てより五位の藏人も。月夜ふむを車ありき
たる。清げなる男のふくげたるめちなる

る悪びありき
いせぬがよ
らんといへ

物語するは二
事年なる児の
何となくア
とつふを云り
みやすくす
美隆云は朝心
陽うさし抄の
といつうぐ

けしきをみ
ふをゆきて
ちとけぬ
ろなり

賢者ふくげある人の年おつるを拍ぐつり
さる人のちごむてあそびしる

細殿あ 四十一段

ほそどのふ人とあまうゝあてありくものどもみ
やまからずよびよせておまどつふよ清げなる
そのこ小舎人さういさどのよきつみぶらろ
ふきぬどもつみふさぬきのこさどうち
ええさるふくろよいさうさる矢いそそ洋さち
どもせありくをたふさふふよついでたふ
がしどのうといひてゆくといとすけしきバ
みやうがりてさうびともいひきくもついで

いぬるものいみどろうぞふらきう

三殿司こそ 四十二段

とのもりづ
さ抄云は殿の
掃除さあお
らるどの役を
る女をなり

とのもりづうさこそたほさうきものいあれ
志も女のきさうささうり浦山しき拍いなりよ
きんよせさうせまきしきうさうてか
よくなりさどつねふよくてあらんいさ
かしくり年おいて物の例などありておまを
きさうさうさういといつきさうさうめやま
のもりづうさの歌あいぎやうばきさうんをも
うりてさうさうさういひてからぎぬさ
いまめううてありさうせまわところをおぼゆま

ずあゑんこそ
あり色折の役
たゞへり。隨身
をつまみよ
まておもつき
いきほひもま
まとい。隨身の
人ぐををつか
まハあゑん。つ
ろく人のみち
り。

職のみぎう
ハ。定子のねを
し。ます申。玄職
の。内。部。屋。を。云
頭解ハ。行。成。々
まり。掌。三。草

まといハ。又。あゑん。こそ。あり。れ。び。み。ぐ。び。
し。き。君。遣。ま。あゑん。ま。ま。い。い。と。ま。い。
く。一。年。を。と。を。う。く。よ。ま。つ。う。さ。と。あ。ひ。い。れ
ども。ま。い。が。い。ね。の。ま。り。み。ど。か。つ。て。あゑん。あ
ま。い。と。ろ。ろ。き。や。

職の御曹子 四十三段

ま。ま。の。は。ぎ。う。の。西。お。も。て。の。た。て。お。と。み。の。も
と。よ。て。頭。弁。の。く。と。お。を。い。と。え。く。し。ひ。ま。い。
れ。バ。い。出。て。そ。れ。の。た。れ。ぞ。い。つ。バ。糸。の。内。侍
なり。との。ゆ。め。な。ふ。は。さ。も。か。つ。ひ。ゆ。め。大。糸
ん。え。バ。お。持。ま。り。て。い。る。ん。お。を。い。つ。バ。い。み。ド

の一人也。

い。み。ぐ。く。え。え
て。云。く。美。隆。云。
是。より。下。の。文
義。ハ。新。成。口。れ
さ。ま。ま。と。を
か。し。き。第。一。ど
ま。ま。て。つ。け。た
る。ゆ。ハ。な。く。て
た。ま。あり。よ。や
ま。ま。う。み。お。し
ゆ。め。を。い。ふ。く
ま。ま。時。人。ま。の
み。お。ま。ま。と
ハ。皆。人。ハ。新。成
口。の。つ。く。ろ。ひ

く。笑。ひ。て。た。れ。ぐ。か。く。る。み。を。ま。い。ひ。き。る。せ。け
ん。そ。れ。さ。る。せ。を。と。か。ら。ふ。あり。との。ゆ。め。い。み
ど。く。ん。を。て。を。う。し。き。す。ぢ。る。と。た。て。た。る。ゆ。い。な
う。て。た。ま。あり。る。や。う。な。る。を。み。お。人。の。み。
り。し。る。ふ。猶。お。く。ふ。う。き。内。心。ま。ま。を。ん。あ。り。れ
バ。お。し。ま。ま。と。を。ま。ま。と。内。あ。ま。け。い。く。ま。ま。と
ろ。し。め。し。た。る。を。つ。ま。お。女。の。お。の。れ。を。よ。ろ。こ。が
者。の。た。ま。お。か。つ。ろ。り。は。士。の。お。の。れ。を。ま。ね。ら
人の。為。ま。ま。ね。と。い。ひ。し。る。と。い。ひ。あ。を。せ。つ。く。中
ゆ。め。と。ほ。た。あ。ふ。その。ま。ま。や。な。ま。ま。と。い。ひ。か。を
して。あ。る。ふ。ま。ま。と。い。ひ。た。ま。い。ひ。お。ま。み。ん。と

なくたぐあり
おかしめを
ささうりの人
ぞとるが文よ
そふんちりた
るをいふなり
さうを清か細
云をぐりハ行
成心の深き心
のおもぶきを
知らうとなり
お村翁の夫婦
のすまふられ
くる流ハさお
へり。

るきこつとももなどつころをさしあふ。然るこ
そらうて見おくれごとくの人やうふときやう
し歌うひるどもせげけさまもさどそしる。
さうふこれうきおしひをどもせむ女目い
たてさまふつき眉いひひおひりり鼻ハ
横さまふありとも。そらうつきあいきやうづき。
おとぐひのきこくびなどをくげよてあふく
からさうん人あん。おひけうるをきといひ
かこのら。猶顔のいとふくげなるい。心うしとのみ
のぬへまいておとぐひ細くあいきやうたぐ
れたらん人のあいうのきさあそ。御前よさ

そ人のさぶら
ふお云あまら
でもそんして
怒しめへどく
目ぐもくの奉
性ハ行成心の
のさまふく。

へあしうけいさる。おをどけいせさせんとも。
其もどわいひそめく人をくづねもなるをも
よびのせつぢねもきていひ黒なるおハ文
のきてもみづうもおそておそくまわくバ。
そかん中ころとまうしよまあらせよなごの結
ふ。其人のさぶらふるどいひ出れどいしもけ
ひりずたをどおをさるあふあふくひさごあ
びあみもよてけしうをらそよきさふハは
れとうしちみすゆまど。おの心の本性と
のみ。のたまひつ。あしつまうさるもの。心を
りとのあへバ。さてさうりさしといひあなる

申よりハ親今の
の世の俚言り
と必ひしよか
くおくよりの
へる親くをわ
かゝる事ある
とあるべけれ
ばよくくんを
とめて見るべ
!

うへのまきぬが
ちハ袍をりり
よて下詔衣をき
ずるり。

みむしふふうとあやしがればつらひつゝ申よ
しをどくし小もいとろくかうかくふとあ
バ何うもづる見えなどもせよかしのぬを
いみどりうらげなきばあゝんいとおお
とのぬひしふよりてえ見えなぬとつべ
おろくもぞなるづらばなるえそとておの
からんつべきをりも教をうべきなるてまこ
とふえぬぬもまごころよそをたごしぬい
りうりと必ふふ三月つごり此冬のをほ
きよくたやあゝんうへのながらよて殿よ
とのぬもありつとめて日さし出るまで式部

うへのおま
ハ一倉院の
おまへの中
定子をり
抄よハかき
ぬをかもの
へよきてとあ
りてかへよ
親の字をあて
たれどいう
之一本よよう
て改り。

のねむしひさしお福するふおくのやり戸を
あけさせうてうへのねまへまのおまへ出さ
せぬればおまもあへどまごふをいみじくと
らそせぬおからぎぬをたごかぎみの上よち
きてとのぬおもたふもつらぬれさうあさう
へおまもましてぢんよういでいるものさど
ほ流む殿うへのつゆあつてよりきておつた
どもあるをうきなるんせそと笑いせぬさ
たうせ給ふよあうらうらういざとおせらる
れど今おなをどつろひてこそとてまあむ
いらせぬひておほやでさきさきともいひあをせ

くろくろくちの抽ひ行
成々の足籠のひま
より厚のうみ足ゆ
るなり。

則隆の或節の逆之
帝人式於庭をどの
考、上帝の侍候の中
家の内方へおれは
法衣袖をるとも心
やすきまをへし。

奉とりの上よ

てあつらふ南のやり戸のそをみきつ懐めてのさ
しいでたろみささうりてさどねのきさつあきさ
るよりくろみくろ物のはゆれをのりきそのがお
たろなめりとおひて見もつ進でなわことあど
もをいつあまいとよく息みくろ顔のさしいでさ
るを則隆をありそいとて見やうたれはあなぬ
かろなりおさましと笑ひささききてき懐ひきを
ほくろくろれど頭弁をてこそおさくろれんえ
なまじつとさつものきさつとくろをさ法共よ
みくろ人いこもさよむきてあつれは顔もんえ
ささき出ていささささくろもえつろくれと

くろく一本よあり
くろくろく一本よあり
ておの心をいひ合
くろくどよまうた
い。
やどかいみと云々
ハ我奴をみまき
と云々のいひで
さやうあつてみ
路ひとさうさ
ろいあまさうばま
みえとこのこまひ
しるあれい。

殿上の名簿抄云殿
上のとのあまうら
侍候等ふるをよら
ねてふのうらへ

のたまふくバのりたうと思ひ侍まバあやぐりて
ぞかきやどかいはんととのうまひいふさつとく
いとふま女いぬぬきたる顔をんつとよきと
又もみえやまらとてまらうつとまらうまらう
つのおさしつとわらうらあをさささうらうら
よとてそれより進いつばねのまだれらちかつ
まなと志たまふあり。

殿上の名だのあえん 四十四段

殿上のなまづいぬんこそを捕をうらま進御前あ人
いぶらふわらやぐてとこおもさうらま音ども志

は吹よ。流口ののり
みすといふも名傷
と同一まゝ
ねとあつて僕に云
耳をねくをうて
といふまゝ抄云耳
をさうつてん

うさひろの左多程
以時明の思方私
程人多て楚忽人を
まげふ程まげ
と思ふ程のかまう
てをうてん
かんがへてハ勤
の部の事もある
ともうつて此
ハ懐く聞ひあうり

てらづれ出るまう人のほつぼねのひんがた
もてみ耳おとなうてまきくふまきく人のあめりみ
いふておねつぶらむうふあつともよき
あぬくまも此おまきつつけたらんいかた
ぼゆらんのだめりうあまきくふくうだむ
もそのうまてぬまきときく程ふ流口の考あら
うらつての音そくめきいづらふ程人のいとさく
ふみくぼねのうてうらうらうのすみの言欄よ言
ひさまづまきとかやうあむまひま流前のう
は向ひてうらうらう誰う侍るとやあやど
こそさううたれ細う言う名のあまきくうさぶ

さいなむる
伊厨子野の流程
以下の詞抄にてハ
程がうたれハ一本
みよりてかく認め
ぬり

や、を抄ふ流こと
あうたがうりや
ハ人をねかふる程
こそまをまねてや
うとつてヤレくヨ
ウくまきくまきり

らハねばよや名をいぬつううまきくぬ
奉るまきくいふととハまきくまきくまきく
まきくて帰るまきくまきくまきくまきく
一へまきくまきくまきくまきくまきく
て流口ふく笑ふまきくまきくまきく
をねきていひのまきくまきくまきく
たが燈よりあらんまきくまきくまきく
くまきくまきくまきくまきくまきく
ぞやとてまきくまきくまきくまきく
あげなき相ノ下 四十五段
善くてよろしきまきくまきくまきく
まきくまきくまきくまきくまきく

まづうらみづから
をかくもいつり
声もふるまふのみ
女よりよむせよ
うらふ上へかへる
文法あり
かゝれまゝさへ枯
れくとも乾めくとも
むいへり。

れてよびたるこそいとあくるれまらなげりも
何とのやかこもどい覺えでいふいをかこい
うつおの局まよふよりて教もどいおぼめか
んいあしうりぬしうねどいぬめうづつさ
ぬあまそいぶがらひ箱人およあるものをあて
よむせよかこもどいうらむもさるまふ
こののららもどいさねどいよい。善悪人と
ちごい肥うちより受領もどおとたごちうら
いあときりもよりあまうりやせからめきさるい
心いられたらんとわらもこのらさよろげよりい
らしかひ童のなりあしうてむらさくもあれこ

ころかりうて句着
積まどえいとすべ
しといへる泥抄よ
供人の表後の彼
るすまどいの時よ
とも着馴てあ

ともどもいざれど志りおちらてこそいけさ
きみつとまゆられいくものきこるげかろい心
うし車のありおことなる事をきそのことよめ
つまどちたういと見えん細らうかうその子
かあおんるど見えぬべき黒きそのまののさそ
ごをう狩衣い何もうちまきバみくろ走る事れ
うくるどおのどおのよてうちそひうらこそわ
がゆめといええね程人うさなりあしうて人つ
うふは日ろりりきやれなごけくうちあくれど
なまをみてつくるきいさるかこなりやつか
ひ人をどいありて。さらさるべのきこるげさうこ

らも罪なく見ゆる
人いさもあまご
とこといへるより
いささうぬべし

人の森の山に借れ
あまごの女を解し
ぐりてのる考あべ
しとまきてたつも
あまごもあまごし
深長いさをもて垂る
もなまべしとて
のむとトひとち
さるなまべしといへり

そ有すくくゆれおふわる人もそこふあ
人とて使もてもまらうどなどのいきちるふも
をうきまらひのあまごゆらいとをうし
人の森れ前をさうおさぶらひめきとるをの
こつちひをさうものるどしてをのこれ十ど
りたうの髪をうげさうひきをへてもささき
てさうも又五つ六つどあまごあまごかみはらび
のせとにかいくみてつらいと赤うふらうの
るふあやまきさおとだちらうおあどさうげ
たういとつらう車とめていごきいれま
しくこそあれ又さていくふだきおれ香のい

志ぢふさちたう一
本よ志ぢよおくり
さうこそとあり
あやうしうんれ
さうの義陰一本
よれはさうの信
と

厨女のみづしをん
さるらうらうおふ
くらやめあまご
ひおとけふさうあ
り

みどくかへさういとをうしよき森の中門
てびらうげの車れ白うほげさうばしとさうの
下さごまのうかひいと清げさう志ぢらふさ
さこそめでさうれ五位六位をどのさうかさね
の志りそさみてさうのいと志ろさうさうち
おきわどしてさういさちらうふよ又さうぞく
しうばやまらひおひさうさうお志んの出入るい
とつきさうしうりやめのいと清げさうさうい
でさうおがさうのく人やさぶらふさういひと
うとをうし

瀧の 四十六段

言世の遊山城紀何
あふん
布留の傍に後トム
んはまかかすし
多路ハ吉野市引の
勝を以てせしのみ
く。

あま川、なると、世
中ハ、何うある、飛
多川、びらの開をけ
ふハせふる、此河
よてあり、古版、る左
の、又、近き、耳、故川、
流れて、君を、おぼし
うた。

浮田川、神つく、斗、磯
りれど、久遠の、久人
言、傳、そ、す。

鶯の橋、八雲、山、折、小
橋、は、ま、ま、ま、周、防、
か、佐、と、つ、り、
山、旁、の、橋、の、下、の、羽、
折、つ、て、ハ、解、け、が、く、
一、本、ま、よ、う、て、補、

音なり。の籠。 布留の籠ハ。法皇の御覽下ふたを
しけんこそめでうられ。 那智の籠ハ。熊野にあ
らうあはまきあうなり。 とどろきうのたきハ。いふ
か。が、や、く、お、そ、ろ、く、ん。

川の 四十七段

あまが川。淵瀬空めなく。そのなからんといとあ
まきあり。 大井川。 いづみ川。 水無流川。 み
と川。 又、何事をさし。とさのくきくけん
をか。 ねく。川。ぬも。と。ず。る。名。と。を。う。
き。る。り。 細谷川。 玉星川。 ぬき川。 浮田川。 催馬
樂。あ。どの。た。ら。ひ。ハ。ま。る。な。る。べ。し。 な。の。り。その

川。 名取川も。いかなる名をとりたるふよとき
あはれ。 吉野川。 天の川。らの志たふもあ
たり。たる。と。つ。め。ふ。や。ど。か。ら。ん。と。業。年。う。う。
けんもま。して。を。の。

橋ハ 四十八段

あまむつ。の橋。 長柄の橋。 あまびこの橋。 演
名の橋。 ひとら橋。 佐野の舟橋。 奇志の橋。
とどろきうの橋。 小川の橋。 かけも。 賢多
の橋。 本曾路の橋。 堀江の橋。 鶴の橋。 杉
ひの橋。 その代流橋。 山麓の橋。 一とせむら
したる。柳。橋。心。せ。そ。ら。ま。ば。名。を。き。く。ふ。を。う。き

ひとら

十市のかま。止保知
と和名ありあまうい
十保市とをを奈良
朝の時。三宮を二宮
と改らねし時保の
字を有きまうまて
誤りありげと濱臣
の説く。

豆代弘訓云。葵ハ三
種あり。一つハ加茂
の祭に用ふる葵。一
つハ蜀葵。うぐいす
と葵。俗よせニアツ

をり。うぐいすの橋。

里ハ 四十九段

逢坂の里。 ながめけ里。 いさめの里。 人妻の
里。 たのめけ里。 朝風の里。 夕日の里。 十市の
里。 伏見の里。 長井の里。 つまとりりの里。 人ふ
とられたるよやあらん我とりたるよやあらん
いづれもをり。

草ハ 五十段

さうぶ。 こも。 あふひいとをり。 祭のをり神
代より志てさうかぶとをりらん。 いみどうめ
でる。 物のさまもいとをり。 たむさうや名

ヒとつふ。 一つハ向
日葵。 一つハヒグルマ。
とハヒマハリ。 とハ
いへり。 三種共ハお
よみみさか。
堀川百首壁におふ
る。 つまで葵のい
つまで。 かねどと
ふべき。 あまきりの
里。

こしき。 草とさの
ふ。 草とさの
ねど。 同物。 昔ハ思
茶。 物思。 さうさ
茶冠。 茶とさ。 け
る。 茶。 茶のふ。 茶
の一名。 茶とさ。 茶。

のをり。 きさなり。 心あがり。 心と思ふ。 み
くり。 ひろむ。 ころ。 こけ。 こぶた。 雲の青
茶。 かさね。 あやのむんよても。 ことおよりハ
さう。 あや茶ハ。 茶のひこひまねらんも。
がふたのむげさくあそれなり。 かつまで茶
ハ。 あふる。 茶いとほのさくあそれなり。 茶のひこ
ひよりも。 こまハ。 茶とげさなり。 まま。 こまのい
し。 使さる。 茶ハ。 えぬ。 茶とあそれ。 思ふ。 こま
き。 ことなり。 茶ハ。 思ふ。 茶とさ。 茶とさ。 思
ふ。 茶とさ。 茶とさ。 茶とさ。 茶とさ。 茶とさ。 思
づれ。 茶とさ。 茶のふ。 茶ハ。 思ふ。 茶とさ。 茶とさ。 思

とつふよつきて利
ひまらうべし。

後集云ふるゝをの
ち志その志はよお
まふらるるれは
よハあふらるる
系ハとつふよと
せらハいづらる

つまらうべし。かゝる物につまらうべし。あなづちふお
ひかゝるうまいとさう。よもぎいとさう。
はまのちの紫いよ。て
をう。まろこそげ。うきささ。あなづち。あ
をうら。やうさとしかお。風ふ吹きたるん
音こそい。のあらんと思ひやらせてさう。けま
なづる。ならささ。いとさう。まもるう
き禁のらうたげよ。のどやうふもあつ池のね
もてよ。たなきさう。ちひさきと。ひろごりた
よひてありいとさう。とりあげておたつ
けるどして見るも。よふいみどらうをさう。やう

むぐら。山さげ。やまみ。ひのげ。後ゆふ。
芦。音の風ふ吹のへされて。うらうのいとさうく
見ゆるをさう。

集ハ 五十一段

古萬葉集。古今。後撰。

歌の題ハ 五十二段

みやこ。くず。みくら。こま。あらま。さ。
つらもみま。ひかげ。こと。たうせ。を
し。あさぢ。志む。あをつら。なり。まつ
め。あさかほ。

草の花ハ 五十三段

古萬葉集ハ万葉集
此より。延喜の比
新撰万葉集出来ふ
し。バ。志。い。へ
ま。る。べし。
こま。か。よ。く。と。あ
れ。と。相。存。る。べし。
と。後。集。い。へり。

あなどれいとりま
まらむふごうがも
一まきまふり。
かひろきいあやふ
げよよそくとと
とてをそふれと
異色いへり。

千載系ふ登早忠日
ハ神の心ハハがけ
さくつこままづま
びくらん。

うらまいとこきざ。お音ふぬれてお鹿きつる。いさ
ぞつりの物やハあ。秋のをてぞいと見不るさ。
色ハおぬき候ころハ花のかさもたなく散るる後。
冬のも忍まざかハいと白く。たなどれころ
そもあついでむく。思ひ出が不よまびきて。かひ
ろぎさつそく人よこそ。いみじうあふぬまよそふ
るの者て。それをしもこそあハれとも思ふづけ
れ。萩ハいと色深く。えぞたをやりみ候ころが。
朝露ハぬまて。なあくともひろごりふ。つるさを
鹿の^ハきて。三ならきころんも心ことなり。 から
あつひら。ぬらきて見えねど。日のかげよ。ころの

さくつこままづま
脱久あつづ。おふ
例のま。くま
許まや。あれど。ま
さくつこままづま
ま。

ひろか。うづくらんぞるべとの草木の心とも覚
えぞそ。の。き。どの。色ハ。こ。から。ね。ど。う。く。ふ。吹。お
ハ。い。ま。つ。づ。も。こ。と。ある。事。を。くれ。ど。そ。り。を
て。ぞ。ん。と。よ。す。れ。な。る。さ。ま。ま。が。ふ。を。う。い。さ。う
びハ。ち。う。く。て。枝。の。さ。ま。ま。ど。ハ。む。つ。の。う。れ。ど
を。う。雨。る。ど。と。れ。ゆ。き。う。ら。水。の。つ。ら。ろ。ぎ。の
ち。な。ど。の。つ。み。み。ど。れ。候。ころ。夕。を。え。

枕草子のなまき物 五十四段

十二年のふごりりのわうのめおや。ま。ぬ
不。よ。や。み。な。つ。お。ゆ。き。た。つ。ふ。あ。ら。そ。ふ。を。ぞ。あ。ふ。
と。て。火。と。し。も。さ。で。ふ。を。ぐ。ふ。な。み。あ。つ。る。い。ま

いもか
陰

やんぐとまき物も
たせてハ折よつ
多めくこくハ大切
小思ふ物也。

人の顔見知りぬ物
見とハ今日世は後
者の名を知らざ
居えらぶめきとい
ふ。

雨と雪の候は一本
火と水と肥と人
とやせと人とも
か長き人とみと

いづきつるも此の心もあふぬふやんぐとまき
物もつせて人のがりやりたるふおそくかつる
物いもぬちごめそりらつて人よもつご
うぬむさきたる。 らんきよらちごらひらる。
人のかねんあふぬもの見。

たしへなき物 五十五段

夏と冬と。 よつとひると。 雨ふるも目てると。
若きと老ると。 人の笑ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
きと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
と。 雨と。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
せぬら。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。

色
いね
抄
本

きんとも

いねさまじりくハ
いねさまじりくハ
抄まらざるごと
本ハいねさがま
ととあり。

けそうハ顯證よて
あらハなるなり。 陰
ハあらうのりるな
るそとをさ反せバ

ときをなまするふよ鳥の寐て夜中むらりよい
ぬさるごう。 ねぢまどひまづらひて。 ねおびま
くつる。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
をさう。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
一それいみどらう。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
らふ。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
ふべき事。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
み。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
いとけ。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。
みどく。 思ふと。 思ふと。 思ふと。 思ふと。

枕
草
子
巻
二

こころとちるまう。

はげさうハ。ぬま
ろく。我よんそけ
て。来る人あり。

ハ。心そのくそハ
ちるバ又も。せけ
へん。うきよの中
かへく。はも。がま。

鏡のわたの。く。物のそこちる。やう。よき。つ。ゆ
も。を。ら。し。ち。の。あ。り。も。ぞ。め。い。づ。ね。の。う。ち。よ。は
を。こ。め。な。の。う。け。を。い。づ。う。物。深。く。遠。き。が。つ
ぎ。く。あ。る。ま。あ。く。ふ。近。く。聞。ゆる。も。を。う。し。け。い
う。ん。よ。そ。ま。い。ら。い。づ。き。よ。も。あ。い。ず。た。ら。う
ち。か。い。ひ。よ。い。も。あ。い。ね。だ。た。の。づ。う。ま。る
ど。も。る。ん。の。せ。の。う。ち。う。て。あ。ま。い。ん。く。あ。く。お。る
ど。い。よ。つ。り。て。と。み。よ。帰。り。げ。も。を。ま。い。を。い。も
あ。る。を。の。こ。も。い。る。と。そ。の。く。え。も。く。ち。ぬ。き
な。あ。り。と。む。つ。う。れ。バ。な。が。や。う。み。う。ち。た。の
め。て。み。そ。う。み。と。思。ひ。て。つ。ら。あ。ど。も。あ。ま。い。び

がんならう。く。あ。う。ハ
煩。惱。苦。惱。あり。

は。あ。ら。ん。ハ。抄。お
か。や。う。の。下。人。を。見
せ。い。え。ん。こ。そ。ハ。く
と。あ。ま。が。ご。と。し。

ハ。心。よ。ハ。も。ち。水
の。傍。り。へ。り。つ。そ。で
お。も。を。い。ふ。ま。ま。ら
れ。る。

ハ。が。ん。を。う。く。ま。う。く。れ。今。ハ。秋。中。ふ。い。な。り。ぬ。ら
ん。さ。ど。い。ひ。い。づ。い。み。う。心。づ。き。れ。く。か。の。つ。あ
を。の。ハ。と。う。く。も。お。お。え。ず。然。お。く。る。ん。こ。そ。を。あ
し。う。え。き。つ。る。事。も。う。す。う。や。う。よ。お。お。ゆ。ま。又
い。ひ。う。め。き。い。る。む。さ。い。ゆ。く。あ。の。と。く。と。を。う。し。
た。て。志。と。み。ま。い。が。い。の。め。と。う。て。雨。あ。り。ぬ。べ
な。ど。き。こ。え。い。ま。わ。く。と。よ。く。い。ま。い。ん。ま。ん。い。ま。い
な。ど。の。と。わ。さ。る。こ。そ。う。や。う。ふ。い。あ。く。ね。だ。い。ん
な。ど。と。ぞ。あ。る。あ。ま。い。あ。い。ん。申。う。と。心。ぞ。ん。ん。と。て
ぞ。め。て。あ。り。い。づ。ま。い。

弘綱云。ばり。と
とふんをとめてん
とふんをとめてん

けぬき。和名抄。は
鏡子。介奴岐とあり。
かこてん。名のは相
より出せる。侍。相
ふ。片掃とあり。か
なる。のへり。

ふん。手平。手て。原
を。つふ。

ありがとき物 五十六段

志うとふほめらるむ。又志うとあよも
うよあめきみ。物よくぬらる志うよみけ
ぬき。志うそしらぬ人のまき。露めらせか
もなくて。かこら心ざもをさきて。世よあるほ
ど。いさ。あけき。ずまき。目。あよ。ほむ。人の
か。み。よ。も。ち。か。も。い。さ。の。け。ひ。ま。れ。く。よ。う
い。さ。り。と。思。ふ。の。つ。ひ。よ。見。え。ぬ。こ。そ。く。ら。れ。
物。集。る。と。書。う。つ。も。か。ん。よ。も。み。つ。け。ぬ。と。よ。き
双。紙。を。ど。い。い。み。ど。く。心。志。て。か。け。も。ふ。こ。を。き
た。な。げ。ふ。る。あ。れ。男。も。女。も。法。師。も。契。ふ。く。

おこすの。下。ふ。めり
が。く。く。と。さ。さ。く
め。り。

語らふ人の。末。より。申。り。き。事。く。く。つ。ひ。よ
き。だ。ん。ざ。かい。ね。り。う。う。せ。く。ふ。あ。な。め。で。こ
と。ん。え。て。お。こ。も。

肉のつがね 五十七段

肉のつがね。い。ぬ。殿。い。み。ど。う。を。う。か。み。の。こ
志。と。み。ぬ。れ。バ。風。い。み。ど。う。吹。入。く。ま。も。いと。涼
し。お。ハ。雪。霰。を。ど。の。風。よ。く。ひ。て。あ。た。る。も。いと
そ。の。せ。ぞ。く。て。わ。い。べ。を。ど。の。の。が。り。あ。ら。う
を。あ。ら。れ。バ。屏。風。の。う。ろ。ろ。な。ど。か。く。し。は。え
た。ま。ば。ら。と。あ。の。や。う。よ。高。く。笑。ひ。ま。ど。も。せ。で
いと。う。ひ。ま。ど。も。た。ゆ。ま。ぎ。心。づ。く。ひ。せ。く。

おまびを初みお指
りてさくくとい
へるいたがへりわ
名振し指を於と比
とよめり。さればす
べて指をつゝ小指
ふいあゝば源氏よ
おまびをさうめて
とあまよても考ふ
べし。

傍に云かけまぐ
い。法とてよむへき
れたのくけ金ハそ
れすくうてくま近

ゆるるるすすいささうおとくくもあまが
いとをりきこらつた言の頼ひとよきこゆる
がとまりてたおよび一つ志て叩くが其人な
まりとふもささそをうくればいとくくく
くふるもせねばあまのささ思ふくんね
くささし打身ぶろくささねのさもひもささ
りと思ふらんく。翁さどつうあもささうお
火をけふやをらたつた火若のきもさのびとれ
どあゆるをいさささくささいりこあよてま
ふよかけあぐくささりよりてきくをりもあり
又あまこのこあよて詩をささ歌をどうくあ

くよりてとつふま
あまが次おささ
つねどまあけこれ
おとあまをささ

へいおまのまま
てかべさうり
ころうおまのまのま
まきなり

らたうねどまがぬれはこくくくくくくく
ぬ人もまともりぬいささささささささ
さささささささささささささささささ
さささささささささささささささささ
おまこころびたえささささささささささ
をいさささささささささささささささ
おまおまおまおまおまおまおまおま
ろおして神うら合せてさささささささ
まおまおまおまおまおまおまおま
いろくのまおまおまおまおまおまおま

かかろい今のお引
をどの程まで元井
みかけてふれうら
まねふりてかか
うと几帳の取巻一
あきうらまをいへる
る。

か改陸阿婆の何翁
樂あうみ先替り申ふ
て浅柴あて次は調
樂とて衆人衆人衆
をうらうらと申ふ
ふあり。

いまで、そのうらうら、やうなるも、とより、えん
いと、さうらうら、んき、いと、ほげ、ある、硯、引、よ、せ
て、より、き、い、ち、い、鏡、こ、ひ、て、びん、など、か、き、な、や、い
ち、ち、も、さ、び、と、を、さ、う、い、三、尺、の、き、ち、う、や、う、を、さ、う、て
た、る、よ、と、さ、う、の、さ、ゆ、い、た、ら、は、さ、う、い、ど、あ、る、と
よ、う、さ、う、人、内、も、あ、い、る、人、と、お、い、し、お、顔、の、ち、と、ふ
いと、ふ、さ、う、あ、い、り、さ、う、さ、う、を、う、ら、れ、う、け、の
いと、さ、う、さ、う、う、ら、ん、人、など、や、い、し、あ、い、る、ん、程
よ、の、さ、れ、い、さ、の、み、ご、あ、い、ん、ま、う、て、ア、ん、ド、の、祭
の、て、う、が、い、さ、う、い、い、み、だ、う、を、う、ら、い、の、ち、う、は
官、人、など、の、長、き、松、を、高、く、と、も、さ、う、て、く、び、い、ひ、き

君うらう、調ふよ、あ
らう、ん、さ、う、り、
日の、う、う、さ、う、ハ、東
岸、と、直、衣、ハ、箱、を、
束、帯、ハ、是、の、よ、そ、ひ
あり。

荒田、小、中、ふ、る、田、草
の花、ハ、古、寺、丸、飾、を
み、え、え、う、ら、

中、め、く、い、た、海、人、の
さ、う、さ、う、わ、め、う、ら、
る、の、さ、う、さ、う、ふ、ん、性
と、て、正、直、と、さ、う、ら、

入、て、ゆ、け、さ、う、れ、い、さ、う、つ、さ、う、さ、う、の、り、な、さ、う、ふ、を
う、ら、う、あ、そ、び、笛、吹、出、て、心、こ、と、お、思、ひ、た、ら、ふ、君
だ、ち、の、目、れ、さ、う、さ、う、さ、う、と、さ、う、と、中、う、り、お、い、ひ、さ、う、ど
は、さ、う、小、殿、と、人、の、さ、う、あ、い、ん、ど、も、の、さ、う、さ、う、を、さ、う、の、び
や、う、ふ、み、ド、か、く、お、の、が、君、さ、う、ら、れ、ま、う、に、れ、い、い、
さ、う、と、あ、そ、び、よ、ま、う、ま、て、さ、う、小、似、む、を、さ、う、の、う、き、こ
ゆ、あ、ふ、け、ぬ、れ、を、猶、あ、け、て、ぬ、る、を、さ、う、ら、ふ、君、さ、う、ら
は、さ、う、あ、て、あ、い、さ、う、ふ、わ、ら、う、と、み、草、の、花、と、う、ら、い、
た、ら、う、と、さ、う、さ、う、び、ハ、今、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、
中、め、人、よ、う、あ、い、ん、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、あ、い、み、さ、う、出
ぬ、さ、う、さ、あ、れ、ハ、さ、う、ふ、を、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、さ、う、
三、十

そつふ
とあつてハガア
てまう。

いそぎ給ふとありてるどいへど。うらちなどわ
あいかくんだふもぬむのりも一人やねひてと
らふるとえゆうやうでまどひ出るをあり。

一声の秋

五十八段

又麻摺記小右記
どふもえうり南の
底のそつぎの底を
つふ又ふこの底を
まて底底まへへ
こもいへり。

こまのほごういふおまもまもこらつてちちなど
ころかよ物ふり屋のさやも言うけどやれど。
まごろみをうらねが母屋いねありとて
みるへごと出て南のひさういふほきちやうこ
てまもこびさういふ女房いさぶらぬこの急のみ
うどより左夷門の陣よみぬあ上達部のももど
と殿上人のいみどりくればおふたにこもると

お下さきハ上達部
こさきハ殿上人の
茶おふをつふ皆底
身のぬまうへへ
とゆふあり。

抄よ進甘くとあれ
ど進後てまへへ
於詠よ池邊水無三
依夏松言風有一声
秋とあつて満せ
らねへ。

聞つけてさるるあまういびよされば其あうも
と皆きこつて進てそまぞかれぞとつふよ又あ
らざるどいつば人て見せやどまらよいひあ
てらるハされぶこそまどいつふもさういあり
あけのいみどりきりりたりたる屋ふおりてあ
まくまきこつてあして清まへまをたきさやぬへ
りうへなる人の皆たりまどしてあそぶよやう
やうのちてゆく左夷門の陣よまうりて見んと
てゆけばまももくと進つぎてゆくみ殿上人あ
まもあうしてまらういこゝ急の秋とどんとて
いるわらまればおげいりて物まどいふ月を見

路ひけるるどめで、舟もむもあり、よろこびひる
も殿上人のゆきおろす。上達部中よりでまゝの
りゆふ。おろあけふいそぐ事なまきい、かある
びすありたきふ。

あぢきなき相 五十九段

こころさハ俗ハク
チクセといふさ
とらこハきふハ
よわさうハぬ
と折あり。
志のびてハ堪忍

こころさハ俗ハク
チクセといふさ
とらこハきふハ
よわさうハぬ
と折あり。
志のびてハ堪忍

こころさハ俗ハク
チクセといふさ
とらこハきふハ
よわさうハぬ
と折あり。
志のびてハ堪忍

あぢきなきハラチ
モナイ。ウトマシイ
さういふさう。

あぢきなきハラチ
モナイ。ウトマシイ
さういふさう。

みとりて、おろふさうまをらびとながく人。

いとほしげなき相 六十段

くよよみてとせしる舟の不めらる。これど
それさう。とほきありきさる人め。つぎくえ
んづねて、ええんといもそれバ、おろしる人の
がり。おほざりふかきてやりたるふ。なまつくそ
りるり。こころさうらして返事とせせで、むとく
ふいひるさう。

こころさうらなる相 六十一段

うづゑのこころさ。神安のふんぢやう。池の
そちよの村雨もあひさう。所靈舎の馬をさ。

てハ一本よふひて
とあり。さうらう
らん。

むとくハハ。さうあ
しげよとつふさ
おろしむとくさ
おの条あり合せ考
あづ。

卯杖のハ。江次弟公
夏根原をどにく
神安の人長ハ。舞人

陪従などの長。法靈會ハ祇園堂六月十四日之禁中より引れし言の長をうまをこと云。松懐ハ懐をうりて人を制しし言の有し。とりむてる物を扱ふよ一服とくさるハさろ。美陸の考ふよりて。ちよよげる物入。くつめらとり程。の程あれど。はこしあふ。

又ほりやう急のふりも。とりもてるもの。くつこのり。除目ふ。弟一の國えたる人。

御佛名 六十二段

佛佛名のあ。さぢごく。給乃。西屏風を渡して。うまは。覺せ。せ。あ。う。給。ふ。い。み。ど。う。ゆ。し。き。ま。限。あ。い。ま。ん。よ。か。し。と。お。わ。せ。し。れ。ど。さ。ふ。見。侍。く。ど。と。て。ゆ。し。さ。ふ。う。へ。や。ふ。さ。ま。こ。ふ。ぬ。兩。い。う。ふ。り。て。徳。然。を。り。と。て。殿。上。く。う。へ。の。御。局。み。め。し。て。ほ。あ。そ。び。あ。り。さ。ま。の。お。納。ま。び。い。と。め。で。し。海。政。の。君。筆。の。こと。行。成。ふ。え。経。房。の中。将。筆。の。ふ。え。る。ど。い。と。お。わ。り。ろ。う。ひ。と。さ。り。あ。

琵琶行ハ琵琶声停。欲語避この語を伊。周公の詠吟せられしなり。

頭中將。初云。恒徳公の三男齊信。は。よ。て。當時。人。ひ。る。こ。ハ。法。少。を。さ。れ。う。後。す。る。べ。し。

そびて。琵琶引やみ。る。秘。ふ。入。納。云。殿。の。琵琶。此。聲。を。や。め。て。抽。語。ま。る。事。わ。さ。し。と。し。ふ。み。を。び。く。ひ。し。ふ。か。ら。れ。う。たり。し。も。お。き。出。て。つ。み。ま。お。そ。ろ。し。れ。ど。程。抽。の。あ。で。し。き。い。え。や。む。ま。ど。と。て。思。ふ。は。あ。う。ま。の。ま。れ。さ。ふ。い。あ。う。ね。ど。を。ま。の。こと。さ。し。に。つ。ら。り。い。で。た。ま。や。う。わ。り。し。なり。

頭中將 忠行 六十三段

頭中將のそ。ろ。ろ。る。る。そ。ろ。ご。と。を。き。て。い。み。ど。う。い。ひ。た。し。な。み。ふ。人。と。お。ひ。う。ん。な。ど。殿。上。よ。て。も。い。み。ど。く。る。ん。ね。ぬ。あ。と。き。く。お。秘。し。け。

い勢物語の後に云
えせごととつら
くつ酒の云々ぞれ
ば柳の涙の太くこ
がへり。

蘭省云々白氏文集
の十七よあり下句
庐山雨秋草庵中と
いへる句ハハハ知
るれどもさるる事
をいへて同のよへ
き家をよらみゆい
まぐらとつらさよ
て京の座を流るる
んとぬそつてり

今きこえんとてふところよひきつきていりぬ。
猶人の抱いあきくまどはるみまをもちまうし
りてさくば其ありつる文をのりてことま
おかせられつるもしくとつふふあやしく俾勢
物語さるやとてんまき青き藤やういふときよ
げふ書のへるをさふときめきつらふふもあ
らざりたり。蘭省花時錦帳下と書て末いひのふ
いひよとあるをいひいふまづうんばまへの
ねとましまさばは流せよまづきをこれぞとま
りがふふたどくしきまのこふふまをんもんぐ
るさどあひまいとをぬまなくせめまどいせバ

あーん

拾遺云々見えまど
玉のうてまもさう
りたりあやめの草
のいりうのみして

たごそのねくふまどびつめの清なる露のあうして
草のいかりを誰かたづねんと書つけてとせ
つまど返るもいとで皆存てつとめていととく
つがねまゆりこれば源中將の声して草の庵や
あまくと地どろくまうとつばまどてうさくげ
さきものいあ〜んまのうてをまめこのまはま
しうまづできこえてま〜とつふあまうね〜ま
まみありくまうまで尋ねんとつる物を
とてよぶあり〜やう頭中將のとのみふまてと
ろ〜く〜まきうねり六位まであつよりて葉の
くねう人音今と語りていひ〜ついでみ猶此と

かいつひゆるハ、お
お、彼後人のいひ
けを、ほろのあふり
言おさうと、ほろと
もさくつ、ねさく
ねさくつ、ねさく
がごとく。

のむがふ絶えて、後こそさきかひえあはぬも
しいひ出るまゆふとよてどいさか何とも思
ひさるむづれなきがいとねさきをこよひあ
ともうとも、さあきりておみるこころとて、皆
いひ合せて、事を見うまどきとて、入
ぬひぬとて、殿づうさ来りしを、又おひかへ
て、たが袖をとくへて、どうさいをさせむ、こひと
りもて、こどバ、文をかへしとれといましめて、さ
むのりふる、雨れさのりみやりたるふいと、さく
及びきたり、これとてさへ出さるが、ありつる又
なれば、かへして、さうさうちんさふあせせて

ためけバ、いと感
とてさけぶ、言の字
治拾送よぬと、人あ
りて、人ころすまり
と、おめけバ、言くと
むよ、同く、うめくと
ハ、別くと、美澄の
り。

ためけだ、あやうい、うさるさうぞとて、皆さうりて見
るよ、いみじきぬとくうれ、猶えこそ、控まどくれ
と見さうさうて、これぞもつけ、てやらん、源中お
つけもるどいふ、おあさうさうで、つけまづひさ
るんや、さよ、此の必、深りつたよ、びき事さうりと
たん、さの、いと、いみじくか、さうさう、いさきま、でい
ひさ、この、せて、西名ハ、合ハ、草のい、かりと、なんつけ
た、さうとて、いそぎ、さうさう、あひぬき、びいと、も、あさき、さ
お、ま、さ、で、あ、さ、ん、こ、そ、ら、ち、さ、う、の、さ、べ、く、れ、と、い
ふ、さ、ど、お、修、理、亮、則、光、い、み、じ、き、さ、う、さ、こ、び、申、ふ、ら
へ、よ、や、と、て、さ、あ、り、た、り、つ、る、と、い、ハ、バ、な、ぞ、つ、う

同くかゝる徳業を
しもあるかゝる
おろく考まひり。

まづとめしこれば
抄云は少を店家の
めこそ少く用事あ
りともすまうくすか
ねと

袖几帳いよ又ふ袖
をふくぎて云々と

んハぢのよともおふまづくなんといへばげふあ
まゝしてさゝりあゝんともさうでねくもあ
りなにかれられもあんむねつぶねねがゆる
秋いさうとせうとさうをばうへまげ時志
ろめ殿上にもつゝさ名をばいとせうと
とぞつけくも袖終るごとくおとどおまづ
とめこれれまありさうふ秋事おかせん
とてさうりうへのさうせぬひてかゝりき
こそさせぬひてそのこども皆福よかきてむ
まねおせらさうよこそあささう何のいと
せらさるふらとおがえさうさそのらふ袖几帳

ある詞をさうして
うけて几帳ハ秋形
をいさへおまれ
ハ袖几帳といへる
さうさう二三句ふ
てとちあてさう
めでさうとめ
ととととと

みくしげどの中
さ子の内妹さうみ
らげぬの下ふの
かきを入るんね
弘福云々

たどとりおきてどひさなりぬあめり。か
る年の二月二十五日ふさま志きのほごうふ出
させぬひさともおまらさう。梅壺ふのこりみ
さうさうの日に中ねのせうさうとてきこのあ乃
夜ぐらまらさうでさうさうさうさうのさ
ぐれだたがふおなんけくさうあげさうんよぬ
りぬべうがならげいさうさうありいさうた
うせでまてとのたまへりさうさうどつがねと福ハ
たどてあるぞさうふねよとてみくらげ殿め
たまばまありぬひさうさうねねきてねりそれバ
さうのみどさうくのたさうさうぬひさうさう

とつふべしと云ふ
とつらら起の字
つららと云ふは
の助と起は
ある事。

サドとみよと云ふ
余情云々本義ハ下ハ
松子と云ふ板を
うらてうらてを
つりてかへ上ハ
うらうらを

わざと侍りうらうらうらへよかうらうらかくあんと
ののひうらうらよまきうせぬまごととてふうけ
りふきとかうらふまをのやうとてまきくねふ
敵守固きて頭の敵のきこえさせ給ふ。只今ま
うり出るまきこゆべき事あるといへばん
るべき事ありてうへよなんのやり侍る。そこみ
てといひてつがねよ引もぬ給ふんと心とき
めきしてうらうらうらうら梅壺は東おめての
半義あげてこそふといへばめでしくぞあゆみ
出給へる。梅のなほいみどく花と。うられ毛
つやまどえもいとむげうらうらふえびぞめの

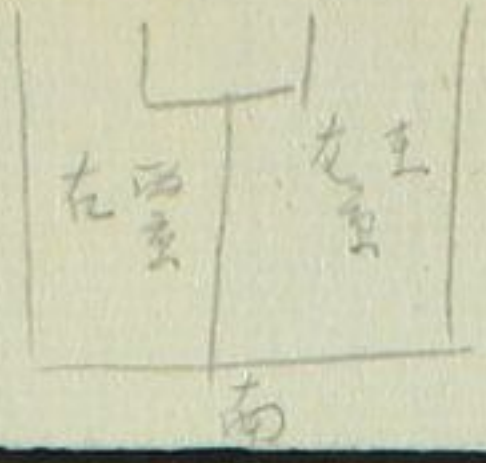
事ハ本義としてあ
り上のちとみよを
あげられハ本義と
ハ名づけらる。

そひるうらふ一平
ふそひるうらふや

いとこまきうらぬふ。藤のまき枝ごとくうらうら
みどりて。紅の色うちめまどか。やくたうらうらぞ
見ゆる志だのよ白きうらまきまどあまきかき
まきうらうらまきまきうらうらうらうらうらうら
ふ陰よかき梅のめでたきまきうらうらうらうら
こそいとまきうらうらうらうらうらうらうらうら
梅とてまきうらうらうらうらうらうらうらうらうら
まきうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おろしうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
どのうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うまておのつしつ
さびちうしんハ
かゝるあつちと
ありこれより
さびさぎハ女のさ
つりさるるあり
おふうもふいひも
とあれど百毒およ
ふつても二さま
まぶきころ次まき
ぬれぬとあれハ保
しるけまハ
とさきハ衆も着
せり

あゝあゝ今がー見おありをうーかゝぬづきよ
いとさびさぎあつちぐーさき人の髪さども我よを
あゝぬぢぬおゝさきさきちりびひて大かゝも
ことさる比るれハあゝそのさきさるさる薄らびあ
とひとこゝえぬきぬどもちどあれハ露のさえも
見えぬふぢもーささぬささきさささささささささ
てみるさるこをぢおごこさひよららさるさるれさき
へさんすあさることづけやあさいつのまああさ
どのぬれさともよぶぬーもささささささささささ
ねてさひひてーさばまつらんとて月のいみじ
うあつたよ西の東よりささささよつぢねさを



ういんてハ倦いて
りて俗ハホツキス
ルキガツマルさ
いふさされどさ
ハいさささささ

ささしおまハさ
し仲老とありさ

多きーおどからううてねおびまて起出さうー
りきいらのささささささささささささささささ
ぬよむげよこそおひうんどあーうぢどさささ
おをバたきささささささささささささささささ
しつもささささささささささささささささささ
らりえんくハをささささささささささささささ
んとおひぬづーおくのうささささささささささ
んうーささささささささささささささささささ
まらさぬまばさささささささささささささささ
あてお湯のよきあさささささささささささささ
いひさささささささささささささささささささ

ハ浦とつよハギ
 ありあはるは
 ちのてすは
 ーをうつひ
 ちちおん
 ちちおん
 ちちおん

ひるさめ
 ありさうつ
 茶よ職よ
 中羽のお
 ーは詞ま
 ーは詞ま
 ーは詞ま

りまさうりさう事さむはられけつまづこれハ
 うみとこつこれ仲忠グフハたひのあや
 をせちよはらさぞさむハ何うおきんわども
 天人おらさむうりひきていともあきんやうみ
 うどのさむもあやいえつとつハ仲忠グかと
 人と心を侍てされむよるどつふよ此事どもよ
 りハひるたむのぶがすありさうりつるをえさ
 うバいかおめでまどハまーとこそおがゆれと
 佐らさむみくささてまさとみ常よりも何さ
 ほううをどつふまづを事らそけいせんと思
 ひてまめり侍りつるみお徳の事みまざれそと

西の系とつよハ
 云々ハ以中羽の
 連よゆくれ
 店云よて侍りの
 ーとあり

白氏文集第四の柴
 府よ西去都門幾多
 地と見えさう

て有つる事をかうりきこせさせられハ誰もく
 つれどいとかくぬいたる系計めすやハ見と
 ほうつるとして笑ふ西の京とつよハのあれさ
 つる事ちちともみ見る人あらまーかバとさん
 ねがえつる垣なども皆おぶれてお妙ひてさど
 語りつれば事おの君のかさうのねハありつ
 といらへたりつるをいみどりうめでハ西のう
 都門をされることいくさくの地ぞとくらさ
 びよさつるさるどががささきすでいひーこ
 そをうーうりーの里ふまのぞささふ殿上人
 どのくもおささうさぞぞんいひるまをい

かゞやきうへんごんご
ハ俗よソムキオトナ
シカラズなごつめ
まうてわうさよハ
あふひ

宰相中納言奇信々
まうり
つらうとハばかめ
里守をよあやうく
まハイヂワロクニ
あまふあがふハ
つてまびハヨク

とあまり心よ引いりたるおがえさるなれば
さいもん人もみくうびよるもひるもらる
人をバ何うハちりなともかゞやきかへさんま
うてむつまどくさどあらぬもさこそハ之ぬれ
あまのうらさくもげよあれバ此ふびいでたる
本をバいづくともなべてよハ志くせび経房漸
政の君などぞのりぞちり給へるな東の射則
完がきて物換などさるついでよきめふも事お
申将殿のいもうとのありどころざりともさ
ぬやうあふとといみどうといぬひーふまよふ
らぬやー申志ふあやふらよ志ひぬひー事さど

知テアルヲシラ
スト云争フハ甚ソ
イワクデアツタニ

めハ和布まごべー
ちうげんハ中まご
おらふまきめあ
ぬまま
ふまうハかぐまん
ことひるまひ
るらんしんは
ハふえうまて不益
なりといハ文雅ハ
あまうまて不
といへり

いひまあまあふぐふいとまびーうこそ有
かれがとくあみぬべのりーみた申将のいとつ
まふくまうは教うてあぬりしをこの君よこ
だよ合せバあみぬべのりーはびてだいまん
けふよあやーきめは有ーをたごうりふとて
らひまぎらうー志のバちうげんふあやーのく
ひ物やと人もんらんうーれどかーらうまを
まてなん申さるありあー笑ひなまーうバふよ
うぞうーまことふあぬるめりどねがーらうー
ををうーうこそなごかこれバさうふまきこえ
給ひそなごいとづいひま日比久く威ぬ夜の

初三軒光此時病人を
きバ隘口を使ふに
せりま。
左使督を扱ふよと
あつハヨウ!

とら手ハまぶる
しつふふふふ
似たりとて相よて
いふうとてまき
以初は氏よりええ
はまをるるとまき
ええさり。
めを一寸半はしつ
つみてハ我ありら
をふちとせのふふ

たふけて門おどろくしくたければ何のかく
心ゆとなくとわうぬをたをくらんととき
中てとハそれバ隘口をりたり。左使のりみと
てふみをまてきさり。皆終みさるよ。火ちうくえ
よせてえればあまふどきやうのけちとさんみ
て宰相申持のほ相忌よことりぬるよ。いさう
とのあり不申せとせめさるうみ。とら手ハまぶ
えかろーやあどき。さことねまうせまらるべきい
ろふ佐よちとてのまんぞいひさる。返すもか
でめを一寸をあり。紙よつみさやりつさうて後
おまて。一紙せめてとせめて。とら手ハまぶるよ

とめくませらるる
あり。

一首ノ心ハアナタ
へ和布ヲ差上タル
ハ漁獵スル海人ナラ
子ト我佳ナラソシ
ヨソコニラルト云コラ
必オニラセ下サルナ
トアナタト目クハセ
ヲスル意デアリマス

てありまのよりのまあやうふさいあむよ。とが
らうとてとら手ハまぶるのまくて。とら手ハ
るめ終まをつみみてぬり。うら。返すもか
なるよ。とつふよ。あやのたぐつ物や人のま
とふさうおつさうてねく。人や。とら手ハまぶる
うと心えぶ。うら。と。見るが。おくれ。おま
ま。で。硯の。ある。か。みの。さ。い。あ。
か。づ。き。ま。ら。あ。ま。お。ま。を。み。う。ら。と。こ。ち。う。ら。と。
ゆ。あ。つ。あ。な。ら。あ。め。を。ら。ま。せ。ら。せ。
と。う。ま。を。せ。い。れ。ば。奇。よ。ま。せ。め。ひ。つ。る。の。更。よ
見。付。ら。ど。と。て。あ。あ。ま。か。い。と。ま。げ。て。い。ぬ。か。う

サテ和布ニ我目ヲ兼
布喰ニ目合ガカサテ
アリマスゾヘ

先師坐位自云いす
せハ支那ニ取らば
足才をとりよとて
既終ふけふを引れ
一ふ六段もかのせ
うといせうとのさ
まてらるのいしせ
のふハ足才ととい
へり漢語云川り

かゝるみよろゝろみかゝるひるどもさうちみ何
事ともさくしてせうし申あしくなりさる此ふれ
こせたりびんまきさゆるとも驚りきこさる
ハ推のいでよそよととさぞなごいんぬんとい
ひさり若ふつあさハ母のまをながさん人ハ哥
さどよみてえささそま下まきさぶてあいかささと
さん思ふべき今ハ限ありて絶うんと思ふん時
さる事ハいつとひびーうバびかっさみ
くづまきさるいもせのふの中をれバ
さうさうさうせくかさとだよんご
といひやりーもまことみんごやなりあらん返

彼ハとりかきよせ
ふり古哥ふまぐ例
あり
ありよき四字一ハ
よれり

左東門の陣みいき
一事前の有づく
き物といふ要はあ
り
美隆云公任集ふ左
東門をまをさしも
のたつふとかかれ
とねばこくもさる
もとよむべき也

事もせずさりみきさてかうぶりえてとかたあ
ふみのかまどいひーうバふくーてこそやみ
あーり

物のあそれ志らせがほさる物 六十四段

もさるるまもさくかみておれいふこゑ
びらふまゆぬくも

左東門の陣 六十五段

さてそのたまつめぢんよいきてのち置みおて
さむーあさふとくまおれまどねせさのち
ふさゑとのぢんへいきーおがけさん若よた
がーからさるいさでさつれさくうちふりてあ

ささくし。栞の扱た
がへり。自分一分デ
ハヒツカニ。とつみ
まへ。
うつが吹上。おろ
け。ほのあはね。ね。バ
ありぬる。中。る。
を。め。志。を。と。
めん。

おめれ一本。ふりれ
り。扱。ふ。ま。あ。わ。ね。よ
とある。ハ。と。ろ。

り。ま。う。ん。い。み。ド。く。め。で。た。う。ん。と。こ。そ。あ。ひ
たり。う。ま。ど。ほ。ら。ま。さ。う。は。返。り。み。か。こ。ま。り
れ。う。ち。で。ま。う。う。ま。い。の。で。り。め。で。う。と
思。ひ。ゆ。う。ざ。う。ん。神。和。も。さ。り。も。申。さ。る。を。と
め。と。ハ。だ。が。め。一。口。覚。ト。う。ん。と。あ。ん。思。ひ。ぬ。へ
し。と。ゆ。え。さ。せ。れ。バ。う。ち。づ。り。い。み。ド。く。思。ふ。べ
あ。め。る。な。り。た。が。お。も。て。お。せ。る。う。ま。を。ば。い。い。で
の。啓。し。さ。る。ぞ。只。こ。よ。ひ。の。う。ち。み。業。の。ま。を。控。て
ま。お。れ。さ。う。ぞ。い。い。み。ド。く。ま。せ。ぬ。も。ん。と。を
む。信。ご。と。あ。る。と。あ。ま。バ。よ。ろ。か。く。ん。よ。て。だ。よ
ゆ。し。ま。う。て。い。み。ド。く。と。あ。る。も。ど。よ。い。命。も。あ

おさる。う。う。う。持。ま。ん。と。て。ま。み。り。み。き。

雪の山 六十六段

志。き。の。み。ぎ。う。う。み。ね。ま。ま。ま。ま。ま。の。ひ。さ。う
ふ。ぶ。だ。ん。の。ほ。ど。き。わ。う。あ。ろ。ふ。佛。を。ど。か。け。ま。り。
法師。の。あ。う。う。こ。そ。さ。う。さ。る。事。は。二。日。が。の。り
有。て。え。ん。の。も。と。み。あ。や。し。き。も。結。く。身。を。て。痛。そ
の。佛。供。の。ね。ろ。し。侍。り。ま。ん。と。い。つ。バ。い。か。で。ま。ま。ご
き。ふ。い。と。い。う。ふ。る。を。何。の。つ。み。の。あ。う。ん。と。ま
出。て。見。れ。ど。老。う。る。女。の。ほう。し。に。い。み。ド。く。ま。ま
け。ら。る。か。り。ぞ。う。ま。の。つ。と。う。や。の。や。う。よ。細。く
経。り。ま。を。扱。び。より。下。五。寸。を。り。ま。る。こ。ろ。も。と

美隆云。以下乞食尼
の事と雪山の事と
交錯して書くる筆
づかひ。いとくめで
なく。は假の文章草
紙中の最とぐれさ
る。ま。は。こ。ん。を。つ。け
て。見。る。べ。し。
佛。供。ハ。ぶ。く。と。よ。む
べ。し。業。花。玉。の。餅。よ
百。糍。の。ほ。ち。あ。ぶ。く
す。五。花。を。う。云。と
あり。

こゑひきつくろひて
はを食の香らうさ
なり。

をみやうハつつか
しきもきく時や
なりをいふ。

とりハ人の機嫌を
そつておそくおふ
そそりやもこハ
浮ふさる。并乳母

りわつふべうらん。同ドやうよせくげころをき
てさるのさまよてつひまりたり。あれハ何事い
ふぞいハ。あひきつくろひて。佛のしや子よさ
ぶらへバ。不とけのたろ。たべと申を。此はさう
たちのを。み給ふといふ。さるやかよみやびか
なり。か。るもの。いうちらんどたるこそあをれ
たれ。う。こ。も。花。や。あ。さ。る。か。な。と。こ。と。お。わ。く
そで。佛の。し。あ。る。その。み。く。ふ。あ。い。と。た。ふ。と。き
事。う。さ。と。い。ふ。け。し。き。を。見。て。な。ど。か。こ。と。お。わ。こ
べ。ざ。う。ん。ぞ。れ。の。さ。づ。ら。い。ね。バ。こ。そ。と。り。申。ゆ。れ
とい。つ。だ。く。だ。もの。ひろ。き。む。ち。ひ。な。ど。を。む。せ。み

集おなまのほしうん
ふ爾を多く植さ
ちちひておろせよ
云とよるハ。これと
わんこハ。たぐう
ふあさる。よるハ。を
一ホ。よ。ま。あ。ハ。と。あ
り。い。づ。れ。う。よ。う。ら
ん。

きうせのひてハ。皇
后のきうせのひ
なり。

とりいきてとくせさるふびげみ中よくさうて。
ふろづの事さうさる。さきく。むできて。男やあ
る。いづこよかむむなむ。は。あ。と。ふ。よ。さ。の。き
事。そ。つ。ご。と。る。ど。さ。れ。バ。う。こ。う。さ。ふ。や。舞。う。ど
さるか。と。と。ひ。も。を。て。ぬ。よ。う。ら。い。た。ま。と。わ。ん。ひ
だちのまげとわん。わたるを。だ。と。う。こ。ま。が。を
魚いとまうり。又男心の峰。け。も。み。ぢ。茶。さ。ぞ。名。を
たつくと。か。ら。を。ま。ら。が。い。ら。い。う。ぐ。く。ふ。く
ら。ま。バ。笑。ひ。よく。みて。い。ね。く。と。つ。ふ。も。い。と。さ。か
し。これ。よ。何。と。う。せん。と。い。ふ。を。き。か。せ。た。ま。ひ。て。
い。み。ど。う。ぢ。ど。ひ。く。か。と。も。う。い。た。き。る。い。せ。と。せ

つらき事なり

わづらひて物のあはれをいまして。いとおやくおく
を。おぢい。い。た。ま。ま。こ。の。心。を。つ。く。ら。せ。侍。ら
んとて。さ。ぶ。ら。ひ。あ。て。お。ほ。せ。ご。と。よ。て。い。つ。た。
あ。つ。ま。り。て。つ。く。る。ふ。殿。さ。司。の。人。よ。て。ほ。き。よ。め
よ。ま。り。る。さ。ま。も。皆。よ。り。て。い。と。さ。く。つ。ら。り
た。す。宮。づ。う。さ。ま。ど。ま。り。あ。つ。ま。り。て。こ。と。く。そ
へ。こ。と。ふ。つ。く。れ。バ。お。の。さ。う。三。四。人。ま。り。た。る。
殿。守。づ。か。さ。の。人。も。二。十。人。ご。り。よ。な。り。よ。り。
聖。を。さ。さ。ぶ。ら。ひ。め。い。よ。つ。ま。も。さ。ま。ど。す。今。日。秋
ふ。つ。く。る。人。よ。い。ろ。く。給。を。す。づ。い。雪。山。よ。ま。り。
ざ。い。ん。く。も。ち。ね。る。ご。う。ず。と。い。め。ん。な。ぞ。

まづさへを后室職
の大夫亮大進お進
属などをつか
所のちうは蔵人所
の衆くくくくハ
職原抄などより
てあるべし。

ういふきしてハぞ
後を傷よきして退
出せらるる。

ふかるともども
後居る座のきふ
よりてかへりい
くもは二はまき
てハ。あ。き。き。ら。ん
が。

い。ハ。ま。い。つ。げ。い。い。ま。ど。ひ。ま。あ。ら。む。あり。聖
と。知。ま。い。え。つ。げ。や。ら。ぞ。つ。ら。り。さ。て。つ。ま。い。宮。づ
う。さ。め。い。て。き。ぬ。に。ゆ。ひ。と。ら。せ。て。え。ん。よ。ら。げ。出
る。を。ひ。と。つ。い。ら。り。も。り。て。を。ぐ。み。つ。ら。い。み
さ。して。び。ま。の。で。ぬ。う。の。き。ぬ。る。ど。き。つ。ら。い。か
つ。い。ま。い。で。将。家。よ。て。ぞ。あ。ら。ご。ま。い。つ。ま。で。あり
た。ん。と。く。い。の。い。は。い。さ。ら。も。十。余。日。い。あり。な
ん。と。い。ま。い。の。い。は。い。さ。ら。の。か。ぎ。り。申。せ。ら。つ
か。よ。と。や。い。せ。し。ま。い。つ。ま。い。の。十五。日。す。で。さ。ぶ
ら。ひ。あ。ん。と。申。を。ほ。ち。も。え。さ。い。あ。い。ま。い。と。わ。が
さ。め。り。女。房。た。い。も。を。づ。て。軍。の。内。つ。ご。も。り。ま。い。

ちくものこが、
くものこが、
とあるは、
きやせの康賢王
母集みつみをきや
さんうらとこはら
とありは、
俗をよあはて。

春三三條院なり

もあらざるとのみ申されあまのつとちくも申てけ
るかるげよえもあまのつとちくも申てけ
どぞ申べかりらるとさういふに、
おでなくといひそめてん事とてか、
がひつ、^三十日のほどふ雨などふまききゆべ
をなすたげぞとらとりもてゆく、
観言こまきやうせ給ふるといめをも物ぐるほ
しとて世山つくりする日武都のぞうこが
は使よてまみりたまはふとぬさくも物ぐるど
いふよ今日の雪山つとらせ給をぬふらんさ
は前めつおもつとらせ給つり、
春三三條院なり

一首の美明く、
旭りくくく、
ふべきをふりあけ
る代といつとつと
めてこ。

とつとらせ給へり京極殿もつとらせ給へり
をどいつと。
くくよのみめづとみる雪のふ。
かころくふふりふくかた。
とかさそらるるくつとつとせれだびくく
ぶきてかつとつとつとつとつとつとつとつと
またりみよめまつとつとつとつとつとつとつと
てたらしよききいみくくこのむとまきくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ひつとんとびのたまをすつとつとつとつとつとつと
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

たれう扱云尾う詞
まり、何ものゆゑと
あり。

常侍のちん一二
のむらうららひさ
ふさうでもわさ
かも豆のいふくひ
うれどといふま
いふかやうあま
あまふいふま
ついでに

あふよひうつらう様よく出ぬるごとく
為陸の女おきつらうまどくみえやうつ
いつばなよかいつらうまきすの侍りか
ふよいかよ何ぞとふよおほくおひ
なりとて長やうふよいづ。
うらやまあもひうれどわつらみの。
いかるあまふまのたまらん。
とまんおひゆりつらうまきすの侍りか
めめおんいれねば雪のふよのがりか
ありきそいぬるのらふ右近の内侍よ
といひやりをきぶなどか人そへて

そらさうしてハト
リツキヤウガナク
テモホフサタニ

あいなすかお角を
ドめの空うて日敷
をたやうふんと思
ふふうひうまき
とおわめいん
さうひのそ
口の長とらう
ゆのそ抄ふ抽葉
やうとき直衣

そせざりかきそらうて雪のふま
ありつらひらんこそいと想
わらふ雪のふいつねるく
たらの目又雪おほくふりたるを
つみたるかなと思ふよ
のをばおきて今のをばか
うへうてつねつととうお
をさるるおほゆの禁の
袖のうつふ青き紙の
なつき出くりそいづ
りといふふとめでつく

抄ふみまうしむこ
おんんとあつるの
家一本よるうされ
ハ基盤るまうし。

卯杖印使六あハ同
トやうまや御甲
ういれり東おより
まうハ地えまど
うを飾りまおん
と源氏抄抄おん
えまう。

りぬまざねたとのごむりたまむまやよあまり
たうみ格子をごむんなどかきよせてひとりね
んとてあくまいとたわうかうらかうなれはひ
しめくふたどらうを給ひてまどまをももとの
たまそすまバ齊院より清文のまぶらこんまハ
いかでういそぎあま侍らまんと申まにま
いととかりまりとしておまを給へり清文あけ
まを給へまハ五寸まこのりまら御継二つを御杖
のまはまがうらつてみるましてまらままひ
かげまをげまどうつらうげまかまらて清文ハ
まらまらまらやうあらんまもとて清らまどれ

毎院のまかえいそ
ひの杖のまハ杖を
つくまんと抄ふあ
り。

内つくひまとつ
まふまトのまか
くてまのてまを
ハまうまうまハ
まやうまれまま
つのいひままら
と美院のまあり。

まうづちのかうらつてみるまらひまき紙ふ。
まともむまのひまきをたづぬまバ。
いとひのつまのまらまらありまら。
まかへうかまを給ふまどまいとめでたし。毎院
まハこまよりまきこえまを給ふまかへうも。猶心
ことまかきまがうたわくまらういみえまら。ま
つかひま白きまらりまのひとまらまらまらハ。梅
まらりか。雪のふりまきたるま。かづきてまら
まらまか。うえま。此まびのま。毎事をまらまら
りま。こそ口ま。かり。か。雪のまハ。まらまらま
こ。のまやあまんとみえてまえげまらまら。

さまであくる。一平
ふさまはこれど
とありこれより。

すめやう俗よオ
モロコンデラルニ
といふまゝなり。

こむりい。ホちうて
抄よつてこれころ如
く庭あるをを守
るとして、門のまゝ

くたりて。見るかひもさきよほどさくる。かちぬ
るころちして。いかで十五日まらつげせん
ねんぞれど。七日をだふえさぐとと猶いつバ
いかでこきみそてんと。皆くあふれどふ。戒よ三
回うちいらせ給ふべし。いみどう口さく。此山
れそてを志らざるなり。事とすあやかよあか
ほどふくもげふゆうかりつる。と結をさどい
ふ。あまつもおせらる。同づく。いひあて
あらんぜせん。とさつるかひなけき。は物
具とさびいみどうささき。さきふあをせて。こも
りといふもさく。づいぢのわどにひさく。うして

どの小屋を造りて。
すむむはるまへし。
めでこきろく。結
構ある下。れ物あ
らんとする。

みつるをえんのもと近くよびよせて。此雪の山
いみどくまもりて。わらさぐさどふふみちらさ
せずこぼさせで。十五日までさぶらませ。よくよ
くまもりて。其日あはさ。はめでさきく。路を
きんとす。わさく。いみどき。さきこびいそ
んるどかさうひて。老よだい。もん。所の人。びす
どふこひて。くさく。だおやる。よやと。いと多く
とらせ。これ。おきみて。つと。やまき。こと。た。か
み。ち。り。ゆ。ん。づ。ろ。そ。る。ど。ぞ。の。り。ゆ。ん。
といつ。ば。そ。を。を。せい。て。き。の。ら。ん。も。れ。い。こ
との。ゆ。を。や。せ。ま。ど。い。ひ。き。う。せ。て。い。ら。せ。給。ひ。ぬ

これぞうろめが
きいづの雲の山の
不安心をなげき
さすをうめハ禁
中まけつうさ
いやき女ん

あらうさあいつハ
秋のほろとほろさ
よそ
あふぶごらりハ
今の雲の園をぞ

是が七日までさふらひて忠ぬ其ほどもこまが
うーろめこまきふおわやけびとすまーをさ
めらどしてさえぞいまーぬりぬり七日の御
佐のぬるーなどをやりたまはをのみつるる
ど帰りてかわらひあつりあつてもあくるする
そらこれをお事みーと見せぬやう十日の不
どふ五六人むありありとつづきつづき
ふ十二日の夜雨いみじくふまばこれぞきえ
ぬんとといみじういさー今日一日をすらつて
とよるもねきめてるげなきく人も物ぐるや
しとさふ人のおきてゆくみやがておきあさげ

よて程のうろめ
うろ

こころもさう
ひりうハけささ
づうさきささ
しうのちにゆも
ろくとつふさを
くめり

まおこさささよふおまねばうみねぞ
れておきいでるをやりて見さればくらふだ
むかりよなりて待つこもりいとこらわ
いづもよせでまなりてあさをあやてもさ
らひぬべーぞく絵もんと申といひいみじ
くうれーつーのぬりよあらばいとさう奇
らみておよい進てまぬとんと思ふさいと心
おとなうさびーうまだくらきふさきふるをり
びつるをもたせてこまふ白うらんおひさもの
いれてもてこきたるげあらんいかきまて
どいひくめてやりたねだいととくもたせて

らん止れむハ屋
ヲて思ヒムスボル
ル是ハ抄の流さの
つり一本まはうん
ドとあり俵トふ
てギョツカラスル
まこいづれもくも
きこえたり。

やりつるおひきさげて。さううせ侍りまけり
とつふよつと浴衣。をううよみ出て。くよも
語りつるつさせん。とうめき。ざんドつる哥も。い
とあさましくかひま。く。い。あ。つるらんき
のふさむのりあり。らん。おを。よの。不。ど。よ。き。え。ね
らん。こ。も。い。ひ。く。ん。ど。れ。バ。こ。も。り。が。申。つ。る。ハ
昨日いと。う。う。う。ね。る。ま。で。侍。り。き。ろ。く。を。給。も。ろ
んと。思。ひ。つ。る。お。を。給。も。ろ。む。な。り。ぬ。る。事。と。ま。を
うちて。中。侍。り。つ。る。と。い。ひ。さ。ら。ぐ。よ。肉。より。ね。侍
せ。と。あ。り。て。さ。て。雪。ハ。今。日。ま。で。あ。り。つ。や。と。の
た。ま。の。せ。た。れ。バ。い。と。わ。く。く。口。を。け。れ。ど。事。此

あせきせハ。ま。中
上。い。入。て。き。こ。え
よ。せ。つ。る。ま。つ

が。う。ハ。帽。子。ま。で。
ま。つ。う。ひ。の。つ。ら
き。で。ぬ。り。ま。こ。い。ま
ま。ま。の。い。

うらついたち中。で。だ。よ。あ。い。ど。と。く。と。け。つ。一。路
ひ。昨日の。夕。ぐ。ま。ま。で。侍。り。一。さ。つ。と。か。一。う
と。なん。思。ひ。た。ま。ふ。る。今。日。ま。で。い。あ。ま。り。の。事。よ
なん。夜。の。わ。ど。よ。く。の。あ。く。お。り。て。と。り。を。て。侍。る
ふ。や。と。なん。ね。一。も。の。り。侍。る。と。け。い。せ。さ。せ。給。つ
と。き。こ。え。う。せ。つ。さ。て。二。十。日。よ。ま。あ。り。こ。ろ。よ。も
ま。が。ほ。る。を。侍。前。ま。ま。も。つ。よ。お。き。え。つ。と。て。あ。さ
の。の。ぎ。り。ひ。き。ま。げ。て。ま。て。ま。い。つ。ら。る。が。う。一。れ
や。う。ま。で。と。ま。な。ら。せ。ら。ま。う。で。ま。い。つ。ら。る。の。ば。ま
かり。一。事。物。の。ふ。こ。よ。ふ。山。う。つ。ら。う。つ。ら。り。て。
白。き。紙。よ。歌。い。み。ド。く。の。ま。ま。と。ま。あ。ら。ま。ん。と。せ。

夕より一本子夜とあり。これより一

夕より一本子夜とあり。これより一

夕より一本子夜とあり。これより一

事をと啓さればいみじくも笑ひて給ふ所ある
人にも笑ふよ。かう心よいつ事して思ひゆく事を
ぐへられば飛ららん。まじくとも。四日の夕より
さあつびどもやりて。とりもてやせくぞかへり
ごとよ。いひあてたり。こゝそをわ。りり。か。そ
箱出きて。いみじくも手をとりて。いひられど。たほ
せ。ごとぞ。かのよりき。い。ん。く。よ。う。き。か。を。を。
さ。う。ば。や。お。こ。が。と。せん。といひ。く。左。近。の。つ。か。さ
の。南。の。つ。ひ。ぢ。の。と。ふ。皆。と。り。と。て。り。り。い。と。言
くて。ま。く。な。ん。あり。つ。ま。い。ふ。な。り。か。ば。げ。ふ
二十日までもまら。つ。けて。よう。せ。び。い。今。年。は。福

夕より一本子夜とあり。これより一

雪もふりそひます。う。つ。も。ま。き。こ。め。て
いと思ひよりが。そ。く。あ。ら。が。ひ。たり。と。殿。上。人。を
どもおねせられ。う。り。さ。て。も。か。の。哥。を。か。と。れ。
今。ハ。ひ。い。ひ。あ。ら。い。つ。れ。ば。同。ド。ご。と。か。ち。こ
り。語。ま。さ。ど。御。前。の。もの。た。ま。い。せ。ん。ふ。も。の。こ。ま
い。ど。何。せん。よ。の。さ。び。の。り。の。事。を。う。け。こ。ま。を。り
な。ご。う。け。い。侍。い。ん。さ。ど。ま。め。お。か。よ。う。ぐ。心。ら
か。ま。お。う。つ。も。こ。ら。せ。給。ひ。て。ま。こと。よ。事。ひ。い
れ。わ。く。の。人。な。あり。と。見。つ。る。を。こ。れ。よ。ぞ。あ。や
く。お。ひ。い。さ。ど。御。せ。ら。う。よ。い。と。な。つ。ら。く。う。ち
も。な。き。ぬ。づ。き。心。地。ぞ。と。う。い。で。お。を。れ。い。み。づ。き

いよるんきよふふふ
り・

標註者 卷二

世の中ぞかゝ後ふふりつみうらゝ雪をうら
とわむひゝをぞれいあいなゝとてかきけよ
どおほせごと侍りゝかと申せばげよかゝせど
とねぼゝくもなまゝんどうへも笑もせなうゝま
す。

標註枕草紙讀本卷二終

明治廿四年九月十日印刷
全 年九月十二日出版

版權
所有

標註者

佐々木弘綱

東京神田區小川町一番地

印刷兼
發行者

弦卷七十四郎

新海縣下北蒲原郡葛塚町

發賣所
六合館

弦卷書肆

東京名橋尾南傳馬町丁目土番地



